

優秀賞
(子どもの部)

「あなふさぎのジグモンタ」

荒川区立尾久宮前小学校二年

金子 杏菜

やなぎ田くにお先生へ。

わたしには、赤ちゃんの時から大じにしているぬいぐるみがあります。たくさんだっこをしすぎて、うでがほどけてしまったり、中のわたが出てきてしまったりしていました。だけど、お母さんがそのぶ分をきれいになおしてくれて、とてもうれしくなりました。

夏休みに『あなふさぎのジグモンタ』を読みました。「あなふさぎ」のしごとがおもしろそうだと思います。

って、この本を読みました。

ジグモのジグモンタは、「あなふさぎや」をしています。ようふくにあいてしまったあなをふさぐしごとです。だけど、このごろはみんな新しいものをほしがって、「あなふさぎなんて、やくに立たないんだ。」と、おちこんでしまいます。

わたしは、ふるくなったものを大じにするということについて、もう一ど考えてみました。ものはふるくなってしまっても、なおせばつかえるものがたくさんあります。ジグモンタは、ハリネズミのすえっ子のおふるのべールを花や草をつかってリメイクしました。そのおかげで、とてもすてきなべールでけっこんしきをあげることができました。

それから、ふるいものは、だれかが大じにしてもものなのだと思います。ジグモンタが毛ふを

なおしてあげたフクロウのお母さんは、毛ふのあなを見て子どもたちのいたずらを思い出していました。わたしもお兄ちゃんが大じにしていたズボンをもらったことがあります。お兄ちゃんが気に入っていると言っていたのを思い出し、大じにきました。

わたしはこの本を読んで、これからもものを大じにしようと思いました。もしもジグモンタみたいな人に会ったら、あながあいてしまったお気に入りのふくをなおしてほしいです。そうしたら、そのふくをずっと大じにしたいと思います。

柳田邦男先生からのメッセージ

〔優秀賞〕

金子杏菜さんへ

絵本の『あなふさぎのジグモンタ』の主人公ジグモンタは世の中の人々が新しいものばかりを追いかけるなかで、衣類などの修理をする仕事のやりがいを見つけていたのです。でも、ハリネズミのひめに古いベールを花や草を使って、すてきなベールに作り直し、結婚式に役立てたという物語から杏菜さんは、古いものを大事にするこの意味を考えたというのです。

絵本は、単にかんたんなお話で読む人を表面的に楽しませるだけのものではありません。絵本を創作（そうさく）する人（絵本作家）は、簡単（かんたん）な童話的な物語であっても、その奥（おく）に、人が生きることやつながりあうことなどについて、深く考えるヒントを忍（しの）びこませている。

るのです。

杏菜さんは、そのことに気づいたのですね。ジグモンタの仕事からヒントを得て、自分が赤ちゃんのときから大事にしているぬいぐるみや、お兄ちゃんのお気に入りだったけれどゆずってもらったズボンのことを見つめなおして、身近（みじか）な「もの」は単なる「物」（物質）ではない、「ふるいものは、だれかが大じにしていたものなのだ」と気づいたということです。

たとえば絵本でも（あるいは絵本だからこそ）、すーっと読んで終わりにするのでなく、自分の人生経験（じんせいけいけん）や人間関係などを、絵本の物語に重ね合わせて、深く考えてみるという読み方が大事です。杏菜さんは、しっかりとそういう読み方をしているところが、すばらしいです。